



Data

監督: 李仁港 (ダニエル・リー)
 製作: ツイ・ハーク
 出演: ウー・ジン/チャン・ツイイ
 ー/チャン・イー/ジン・ポー
 ーラン/フー・ゴー/チュイ
 ニーツォレン/ジャッキー
 ー・チェン/ワン・ジンチュ
 ン/ホー・リン/チェン・ロ
 ン/リュウ・ギョウフェン/
 ロブ・ラヴァン/トプギェル

👁️👁️ みどころ

1960年に中国隊が世界ではじめてチョモランマ登頂に成功！それは本作導入部を観ている限り本当のようだが、それを撮影したカメラがなければその信用は・・・？そんな失意を乗り越えて、あのチームの面々が1975年には国威をかけて再度の挑戦を！

『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー』(17年)で「中国版ランボー」を演じ、500億円の興行収入を挙げた俳優ウー・ジンが、2発目の国威発揚映画たる本作でも山岳スーパーアクションへの挑戦を目指したが、その評判は？

「男はあくまで強く！女はあくまで美しく！」その価値観は本作でも顕著。しかし、おさげ髪はまだしも、気象観測班主任として高地に登頂しながら、あくまで色白美人にこだわっているチャン・ツイイーを観ていると、その非現実性は・・・？

新型コロナウイルス騒動では、今や中国の米国に対する優位は明らか(？)だが、さて、本作による国威発揚の成果は・・・？

■□■『戦狼2』に続き、本作で二発目の国威発揚を！■□■

文化大革命の大混乱の後、1980年代半ばから、はじめて中国から日本に紹介された映画は、『黄色い大地』(84年)、『シネマ5』63頁)や『紅いコーリャン』(87年)、『シネマ5』72頁)等の「いかにも、これぞ新生中国映画」と言えるものだった。また、日本人が大好きな中国映画の代表となった『初恋のきた道』(00年)、『シネマ5』194頁)と『山の郵便配達』(99年)、『シネマ5』216頁)は、「これぞ、素朴な中国映画」と称賛された。とりわけ、『初恋のきた道』でのおさげ髪がトレードマークとなった女優チャン・ツイイーは、多くの日本人を虜にした。

1989年に起きた天安門事件は、改革開放政策を進める中でもがき苦しむ中国の矛盾点を赤裸々に露呈したが、その後の社会主義市場経済を基礎とした中国の経済成長は著しく、それから30年後の今は、“世界唯一の超大国”アメリカと肩を並べる“大国”になっている。そんな中国で2017年に大ヒットし、中国アジアの興行収入歴代トップに立った映画が、ウー・ジンが監督、脚本、主演した『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー』（17年）（『シネマ41』136頁）。同作でウー・ジンが演じた主人公レン・フォンは「中国版ランボー」として、アフリカ大陸における中国の国威発揚の先導役になった。とりわけ、同作は習近平体制の下で進められている一帯一路政策を象徴する映画として、アメリカは脅威を感じたはずだ。

他方、邦題を『クライマーズ』とした本作は、世界ではじめてチョモランマ登頂に成功した中国登山隊を描くもの。とは言っても1960年の成功は、その証拠となる映像を撮影したカメラを失っていたため、国際的には認められなかったらしい。しかし、それで諦めないのが中国流。“それならもう一度”、そんな決意でチョモランマへの二度目の登頂を描く本作は『戦狼2』以上の、何ともしごい国威発揚映画になっているので、ビックリ。

■□■導入部に見る1960年の挑戦は？キネマ旬報の評価は？■□■

本作導入部に見るチョモランマの山は一見美しいが、天候が悪化すれば大変。その山頂を目指した中国隊は、登頂中に遭遇した突然の雪崩に大混乱。さらに、セカンドステップの崖では、はしご代わりに仲間の背中を裸足で登って成功したものの、その後が大変だ。そんな中、隊員に見守られながら息を引き取った隊長から、その任務を引き継いだファン・ウージョウ（ウー・ジン）は、仲間のシェイ・イン（チャン・ツイイー）、チュイ・ソンリン（チャン・イー）と3人で登頂に成功したが、カメラよりも隊員の人命救助を優先したため、カメラを失い、その成功の証拠を残すことができないまま下山することに。これでは、当時、「大躍進政策」を進めていた毛沢東もチョモランマ登頂に中国隊が一番乗りをしたと宣伝することができなかった。そのため、カメラさえあれば大ヒーローになれたはずのファン・ウージョウ、シェイ・イン、チュイ・ソンリンは不遇の時代を送ることに。とりわけ、ファン・ウージョウは、文化大革命で下放される事態になったうえ、そこで講義していたチョモランマ登頂の話が“ほら話”だと言われ、更なる失意の毎日を。

なるほど、なるほど。1960年の初登頂の「成功」が証明されない状況下では、それもやむを得ない。そんなストーリーは、説得力十分の面も……。しかし、本作導入部に見る1960年の登頂シーンは、『キネマ旬報』10月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」における3人の評論家の評判はそろってよろしくない。当初はシリアスだった『007』シリーズも、次第にド派手なアクションが目立つようになったが、「山岳アクション」とも言うべき本作の登頂シーンでは、『戦狼2』もどきの「そりゃ、ありえねえ」と言わざるを得ないオーバーアクションが続出。サングラスをかけないまま長く続く登頂シーンは、

映画向けとしてある程度は許すとしても、ファン隊長の人間離れた活躍にはいささか閉口だ。これでは、1975年に二度目の成功を収めた時の“スーパー山岳アクション”がどこまで現実離れたものになるのか、心配だが・・・。

■男はあくまで強く！女はあくまで美しく！■

2021年2月のベルリン国際映画祭は男優賞と女優賞を廃止し、ジェンダー平等の映画祭にすることになった。このジェンダー・ニュートラル（性的中立性）の姿勢を強く打ち出した決定に私はビックリ、カンヌとベネチアを含めたヨーロッパの三大映画祭の中でも、ベルリンはジェンダー平等の映画祭へのトップを切ったわけだが、ヨーロッパのそんな価値観に対して、本作では中国流の（？）「男はあくまで強く！女はあくまで美しく！」の価値観が顕著だ。

新聞紙評でほとんど書かれていない本作だが、劇場は満席。もちろん、高齢者ばかりだが、これは、今なお第一線で活躍し、美しさを保ち続けているチャン・ツイイーのファンの日本人観客が多いためだろう。『初恋のきた道』では、おさげ髪がピッタリの可憐さだったが、本作のチャン・ツイイー最初の登場シーンもおさげ髪なので、それに注目！登山隊の花形はもちろん登頂に挑むアタック隊だが、チームとしてそれを支えるのは、機材の準備やベースキャンプの設営等をするチームの他、気象観測というアタック隊の命に関わるチームも不可欠だ。「大躍進政策」の失敗、「文化大革命」の大混乱のため、中国の学術分野はすべて遅れていたが、気象学を勉強しているインは、ウージョウからの結婚申し込みの声を聴かないままソ連に留学していた。しかし、チョモランマへの二度目の登頂計画が国家によって決定されると、インはその気象班の責任者として着任することに。その結果、本作後半からは1975年5月の二度目のチャレンジがテーマになるが、そこではインも正確な気象観測のため、可能な限りアタック隊との距離を近づけるべく、チョモランマを上へ上へと登っていくことに。

そこで、「いくら何でもそこはダメでしょう」と思わせるのは、チャン・ツイイーの美しさを、スクリーン上であくまでもキープしようとしていることだ。私が1960年代の日活映画で好きだった女優の一人に、若手では演技力抜群だった和泉雅子がいたが、彼女はその後探検家に転身した。それはそれでお見事だが、転身後の彼女の、真っ黒（真っ赤？）に陽焼け（雪焼け？）し、ブクブクに太った体形を見た時は、幻滅したものだ。数日間のスキー旅行に行っただけでも、雪焼けした肌が汚く荒れてしまうのは必然。しかし、美しさが武器の大女優になるとそうもいかないから、本作で、チョモランマのベースキャンプはもとより、そこからさらに上に登っていくチャン・ツイイーのお顔は・・・？前述のように、キネマ旬報における本作の評価も低いが、『クライマーズ』が実話？いいから登山家に謝れ！」と題した某氏の映画サイトでは、ボロクソ。主人公ウージョウが国家的ヒーローになる山岳アクションについては、「何もそんなところで中国雑技団しなくてもいいんだよ。ふざけすぎじゃない？」と書いているし、チャン・ツイイーについては、「女性キャ

ストたちは登山家なのに、もれなく色白ってというのがさすがです。チャン・ツイイーなんて絶対山登りしたことねえだろっていうようなバチバチにメイクを決めて出ているんですよ。」と書いている。たしかに、本作に見る中国流の「男はあくまで強く！女はあくまで美しく！」の価値観は、「所詮、映画だからいいじゃない」のレベルをはるかに越えたもの・・・？

■□■国のため！恋人のため！しかし、すべては予定調和？■□■

現在私が毎日愛読中の日経新聞の連載小説『太陽の門』は、スペインの人民戦線に参加している男、サム・ウィルソンを主人公にした物語だ。これを興味深く読むようになったのは、中学生の時に観たアーネスト・ヘミングウェイの原作を映画化した『誰がために鐘は鳴る』(43年)に大感動したことをしっかり覚えていたためだ。同作のラストは、橋の爆破に成功したものの、足を負傷したため逃走を諦めざるを得なくなったゲイリー・クーパー扮する義勇兵ロバートが、イングリッド・バーグマン扮する、愛する女性マリアを残ったゲリラ兵と共に逃走させるべく、機関銃の引き金を引き続けるシーン。「革命のためだ。」「国のためだ。」といくら鼓舞しても気が遠くなっていく自分に対して、「いや、これはマリアのためだ。愛するマリアのためなら、まだ戦える。」と自分自身を鼓舞する姿は本当に感動的だった。しかしこれは、現在の“中国共産党的基準”で言えば、国家的使命よりも、個人的感情を優先させたダメ男のもの、になるはずだ。したがって、それと比べながら、本作におけるウージョウとインの純愛ストーリーを見ていくと、より一層興味深い。

1960年の登頂成功が認められなかったものの、再度の登頂を目指す気力は全く衰えていなかったウージョウが、「今度成功したら、それから君に結婚を申し込む。」と叫ぶチャンス逃したのは、ほんのちょっとした運命のいたずらだった。しかし、そのズレは大きく、15年後の今はお互いにアタック隊の隊長 vs 気象班の班長という、公の任務上だけの関係をキープすることに。しかし、今回もウージョウが悪天候のためチャレンジに失敗し、生死の境をさまよい、インもより正確な気象観測のため無理に高いところに登ったため、肺をやられ血を吐く状態になると・・・。やっと繋がった無線を、必要不可欠な情報のやり取りのためではなく、個人的な感情のやり取りのために使うのは如何なもの？そんな批判を含め、『誰がために鐘は鳴る』に見る、米国流の、「国のため、恋人のため」と、本作に見る中国流の「国のため、恋人のため」の違いをしっかり対比してみたい。

他方、クリント・イーストウッド監督の『父親たちの星条旗』(06年)、『シネマ12』14頁)では磐鉢山に星条旗を立てる兵士の姿が、当時の全ての米国民の願いを代表していたが、本作で、標高8848メートルのチョモランマ山頂に立てた“五星紅旗”に13億の中国人民は何を思うのだろうか？『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー』のラストに観た中国のパスポートの大笑しには思わず失笑してしまったが、本作に見る、「国家のため、恋人のため」をテーマとした“すべての予定調和”にも思わず失笑。

2020(令和2)年10月8日記